第3章

朝鮮人民軍のコードナンバー

朝鮮中央通信,『労働新聞』,『民主朝鮮』といった朝鮮の公式報道において，最高指導者が軍隊の部隊を訪問したことが発表される記事や特定の部隊に関する記事でも，それらの多くは当該部隊のコードナンバーで発表され，当該部隊の編制上の属性などを示す正式名称が言及される場合は少ない。これは最高指導者の演説や報告，談話などを収録した『金日成著作集』や『金正日選集』といった書籍でも同様である。

たとえば，1981年に刊行された『金日成著作集』の第12巻には1958年2月8日に金日成が「人民軍第324軍部隊」の将兵を前に行った演説「朝鮮人民軍は抗日武装闘争の継承者である」が収録されている。また，『労働新聞』2017年1月19日には金正恩が「人民軍第233軍部隊直属区分隊」を視察したことに関する記事がある。これらの文章を読んだだけでは，その軍部隊の位置や属性はわからないようになっているため，最高指導者の視察や演説の背景や政治的意味を知ることが困難である。第324軍部隊が咸鏡南道方面に駐屯する第7軍団であり，第233軍部隊が前線西南部に位置する第4軍団であることがわかれば，それらの視察や演説の内容を文面からだけではなく，時代や地理の背景からも深く把握することができる。

そのため，朝鮮の政治に関する研究でも軍事に関する研究でも，人民軍のコードナンバーに関する調査が必要なはずであるが，日本における朝鮮の軍事に関する研究は，萩原遼氏の著作を除けば，そこまで及んでいないのが現状である。日本共産党機関紙『赤旗』の記者であった萩原氏はアメリカの国立公文書館に所蔵されている朝鮮戦争時の米軍鹵獲資料を分析し，1993年に『朝鮮戦争――金日成

とマッカーサーの陰謀』，1995年に『朝鮮戦争取材ノート』を出版した。さらに萩原氏は，1996年に，分析に利用した米軍資料を収めた3巻にわたる『米国・国立公文書館所蔵北朝鮮の極秘文書』を出版し，自身の研究を誰からでも容易に検証することができるようにした（萩原 1993; 1995; 1996a; 1996b; 1996c）。そこでは開戦前後に南進する人民軍部隊のコードナンバーが少なからず明らかにされた。ただし，萩原氏の研究の中心は朝鮮戦争にあり，しかも，利用した米軍資料が1950年9月以前のものがほとんどであるため，それ以降のコードナンバーについては触れられていない。

そこでここでは，人民軍のコードナンバーについてその目的と付与される対象を明らかにした上で，これまでのところ知ることができる軍団級と師団級の単位に付与されるコードナンバーを示してみよう[1)]。

1 コードナンバーの目的と付与対象

正規軍において，当該単位の編成や性格を示す正式名称とは別にコードナンバーを付すことは多くの国で行われている。しかし，コードナンバーを付与する目的，経緯や対象についての説明がなされることは，以下に述べる日本の帝国陸軍，ソ連軍およびそれを引き継いだロシア軍と中国人民解放軍を除けば，ほとんどない。朝鮮の軍隊に関してもそうした説明が公になされたことはない。

コードナンバーを付与する目的に関しては幸いにして日本の帝国陸軍での例を知ることができる。帝国陸軍で部隊の正式名称とは別の名称を付けることが始められたのは，1937年7月の盧溝橋事件がきっかけであった。同年9月に出された陸軍省の「動員部隊等の称呼名に関する件」では北支派遣部隊および上海派遣部隊を編成して派遣する際に，派遣部隊の兵力規模を秘匿する目的で外地部隊について指揮官の姓を用いることが定められた。その例として郵便，電信，荷物の宛名や差出人名に，上海派遣の第44連隊第1中隊であれば「上海派遣山室部隊気付

1）本章は，筆者が 2017 年に一般社団法人総合政策研究所の雑誌『インテリジェンスレポート』において発表した文章をもとに新たな資料によって，加筆修正したものである（中川 2017）。

和知部隊鈴木隊」と書くと挙げられている（軍事課 1937）。このことは軍隊で正式名称とは別の名称を付す目的は兵力規模など動員計画や作戦行動に関する情報の秘匿であることを示している。なお，朝鮮人民軍でも単位の責任者の名前を冠して呼ぶ習慣は存在する。

しかし，指揮官名の使用は当該部隊のほかに同姓の指揮官がいる場合に不便であり，指揮官が交代すると名称も変わらざるを得ないという弱点があった。指揮官の姓から暗号に変わったのは1940年9月10日付の「昭和16年陸軍動員計画令細則」であり，軍および師団を示す兵団文字符と通称番号が定められた。兵団符号と通称番号は1941年7月10日の「陸軍平時編制細則」で内地部隊に，同年11月14日付の「在満部隊通称号規定」で在満部隊に，1944年2月26日付の「南方軍隷下指揮下部隊の通称号に関する件」で南方軍に拡大された。1945年4月20日「陸軍部隊戦時通称号規定」で全面改訂され，陸軍全体における番号の重複などの問題が解消され，全軍的な暗号としての体裁を整えるにいたった（日本陸軍省 1945）。

ソ連軍の場合は日本よりも早く，1932年に正式名称とは別に数字のみのコードナンバーの使用が開始された。ソ連軍では「軍部隊」（ヴォインスカヤ・チャスチ）と呼ばれる連隊および独立大隊以上の単位にコードナンバー（ヴォイスコヴァヤ・チャスチまたはウスロブノエ・ナイメノバニエ）が付与された。ソ連軍では軍部隊は「組織上独立した戦術と会計事務管理の単位」であるとされ，正式名称とコードナンバーの入った印判と印章一式，および軍旗を有する。この制度はこんにちのロシア軍にも継承されている（ロシア国防省軍事史研究所 1994, 231, 257）。

中国人民解放軍でのコードナンバーは「部隊代号」と呼ばれ，ソ連軍と同じく，連隊および独立大隊以上の単位に付与された。コードナンバーの導入は朝鮮戦争の始まった1950年であり，1962年に全軍で4桁の数字のコードナンバーとイニシャル1字に3桁の数字の組み合わせによるコードナンバーの2種類のいずれかで形式が統一され，1975年に5桁の数字に統一改定された。なお，中国人民解放軍では連隊および独立大隊以上の単位を「部隊」と呼び，編成や性格を示す正式名称を「部隊番号」と呼ぶ（中国人民解放军军事科学院 1986, 53-55; 中国军事百科全书编审委员会 1997, 22）。

1948年2月8日に正式に発足した朝鮮人民軍も軍部隊やコードナンバーに関しては，基本的にソ連軍と同じ制度をとっている。人民軍では連隊および独立大隊

以上の単位である軍部隊は「隊号」と呼ぶコードナンバーと軍旗を有し，会計事務管理の機能を有する。

一般に軍隊では，編成替えによって各単位の正式名称が変更されることがときどき発生する。しかし，コードナンバーは編成替えの影響をできるだけ防ぎ，変更を避けるのが原則である。たびたび変更された帝国陸軍の通称番号でも，大東亜戦争後に未帰還兵を探すときに利用された。そして，人民軍に関しては，コードナンバーに関する情報は軍部隊の歴史，政治指導者の軍事政策を分析する上での手がかりとなるはずである。

2 軍団級単位のコードナンバー

前に述べたように朝鮮人民軍では連隊および独立大隊以上を軍部隊と呼ぶが，これとともに，師団および旅団の単位を連合部隊，軍団級の単位を大連合部隊と呼ぶ。編成や属性，規模などを秘匿するコードナンバーで軍部隊を示す場合，師団級であろうが軍団級であろうが，ナンバーを冠して「第〇〇〇軍部隊」とするのが原則になっているはずである。しかし，朝鮮ではこれに関しておおらかなところがある。1993年3月17日に金正日が軍事部門の芸術公演を観覧した際，翌日の『労働新聞』1993年3月18日は観覧された公演のひとつが「第337大連合部隊芸術宣伝隊公演」であると発表された。この表記は，第337軍部隊が軍団級の単位であることを公にしたものであり，以後，軍団級の単位について，コードナンバーが大連合部隊に付された表記「第〇〇〇大連合部隊」と表記されることも多くなった。もちろん第337軍部隊という呼び方も『労働新聞』紙上で健在である。

このおおらかさによって，1993年3月18日付以降，『労働新聞』では都合24個の大連合部隊が紙面に登場した。それらを数字の順に並べると，第233大連合部隊，第264大連合部隊，第287大連合部隊，第313大連合部隊，第324大連合部隊，第337大連合部隊，第380大連合部隊，第488大連合部隊，第526大連合部隊，第534大連合部隊，第549大連合部隊，第564大連合部隊，第567大連合部隊，第570大連合部隊，第572大連合部隊，第583大連合部隊，第593大連合部隊，第597大連合部隊，第604大連合部隊，第630大連合部隊，第639大連合部隊，第

671大連合部隊，第757大連合部隊，第963大連合部隊，第966大連合部隊となる。

また同時期に『労働新聞』では「第〇〇〇連合部隊」も都合8個登場する。それらは数字の順に並べると，第337連合部隊，第264連合部隊，第375連合部隊，第478連合部隊，第583連合部隊，第587連合部隊，第837連合部隊，第597連合部隊となる。この番号を大連合部隊の番号と照合すると，うち，第337連合部隊は第337大連合部隊とも，第264連合部隊は第264大連合部隊，第583連合部隊は第583大連合部隊とも呼ばれていることがわかる。このことは，『労働新聞』などの公式媒体で「第〇〇〇連合部隊」と呼ばれている軍部隊は独立師団など，軍団に準じた軍部隊であることを意味している。したがって，『労働新聞』などの公式媒体でコードナンバーを冠して大連合部隊または連合部隊と表記される軍部隊，すなわち軍団級またはそれに準じる級の軍部隊は合計29個である。

朝鮮人民軍の軍団組織は1950年6月25日の朝鮮戦争開戦の少し前に始まる。開戦当時の名称は補助指揮所または作戦組であり，第1補助指揮所（第1作戦組）と第2補助指揮所（第2作戦組）があった。7月13日にそれぞれの補助指揮所（作戦組）は第1軍集団，第2軍集団に改編された（兪成哲 1991, 79-81; 呂政 1991, 36）。そして，11月18日に第1軍集団は第1軍団に，11月末に第2軍集団は第2軍団に改編された（ヴォルコフスキイ 2003, 166, 168）。これら2個軍団に加えて，1950年10月から第4軍団，第5軍団，第6軍団，第7軍団，第8軍団が増設された（國防部軍事編纂研究所 2001a, 224-225; ヴォルコフスキイ 2003, 165-167）。1953年7月27日に停戦協定が結ばれ，1958年12月に中国人民志願軍の撤収が完了するが，このころまでに前線には東部から西部に向かって第1軍団，第5軍団，第2軍団，第4軍団の計4個軍団が配置されるようになったようである。

そして，こんにち前線の4個軍団とともに，首都平壌に第91首都防御軍団（別名：第91訓練所，平壌防御軍団），それを取り囲んだ第3軍団，東海岸に第7軍団，第10軍団（旧：第1地区司令部），国境地帯に第8軍団，北部地帯に第9軍団，パラシュート部隊である第11軍団，白頭山地区に第12軍団，平壌地区高射砲兵軍団（別名：逆捕捉高射砲軍団）などが軍団として存在することは閲兵式に関する公式報道に示されている。したがって正式名称に「軍団」の文字が入っている軍団は13個あることがわかる。そして，これらともに，空軍司令部（旧：航空・反航空軍司令部），海軍司令部，戦略軍司令部，護衛司令部，第425機械化歩兵師団（別名：第

425訓練所），第108機械化歩兵師団（別名：第108訓練所），第815機械化歩兵師団（別名：第815訓練所），第806機械化歩兵師団（別名：第806訓練所），第518砲兵師団（別名：第518訓練所），第105タンク師団の計10個が軍団級の軍部隊であることも閱兵式に関する公式報道に示されている（『労働新聞』2017年4月16日; 2018年2月9日; 2018年9月10日; 2020年10月11日; 2021年1月15日）。ただし，第105タンク師団の上級単位として第820訓練所が存在することが亡命者から伝えられている（イ ジョンヨン 2007, 223-224）。

そこで以下，第1軍団から順に先に述べたコードナンバーを当てはめてみよう。

江原道金剛郡周辺の前線東部に配置されている第1軍団は第313軍部隊である。これは,『労働新聞』1998年12月28日の記事では同軍部隊が前線東部に位置することが記され，また,『労働新聞』2003年2月6日には軍事境界線の沿線地帯にあることが記されていることからわかる。

開城周辺の前線西部に配置されている第2軍団は第567軍部隊である。これは,『労働新聞』1996年4月26日,『労働新聞』1998年1月28日,『労働新聞』2001年3月1日などで，1963年2月6日に金日成と金正日が開城南方にある大徳山に位置する同軍部隊の前方指揮所を訪問したことが記述されていることからわかる。

首都の周りに配置されている第3軍団は第526軍部隊である。『労働新聞』1967年2月9日により，1967年2月8日に金日成は「鄭炳甲が所属する部隊」を訪問したことが発表されたが, 1983年に朝鮮労働党出版社から刊行された『金日成著作集21』では，この訪問は同軍部隊を訪問したことになっており，一方，鄭炳甲が同軍団長であったことは同軍団にいた亡命者である呂政が著作『赤く染まった大同江』に記述していることからわかる（『金日成著作集21』1983, 130-134; 呂政 1991, 24-25, 138-139）。

黄海南道康翎周辺の前線西南部に配置されている第4軍団は第233軍部隊である。これは『労働新聞』2001年5月9日により, 2001年5月8日に金正日が康翎を訪問し, 同日に同部隊芸術宣伝隊公演を観覧したことが記されていること,『労働新聞』2012年2月26日に同部隊が西南前線地区に位置することが記されていることからわかる。

江原道鉄原郡周辺の前線中部に配置されている第5軍団は第549軍部隊である。これは，2013年6月2日に金正恩が前線中部にある五城山の哨所を訪問した際に

第549軍部隊の部隊長が迎えに来たことが『労働新聞』2013年6月3日の記事に記載されていることからわかる。

なお, 第5軍団に関しては第327軍部隊というコードナンバーも用いられたことがある（リ スニム 1983; 社会科学院歴史研究所 1981, 116）。1951年6月29日に金日成が同軍部隊を訪問した際に，この軍部隊のなかの英雄としてハン・ゲヨル，カン・ホヨンの名前が挙げられていた。前者は第5軍団6歩兵師団15連隊の所属であったこと，後者は同軍団12歩兵師団の所属であったことで，同軍団が同軍部隊であることがわかる（『金日成著作集6』1980, 390-398;『労働新聞』1951年7月2日; 2014年7月26日; 2023年11月7日; 2023年11月9日）。

東海岸の咸興周辺に配置されている第7軍団は第324軍部隊である。これは,『労働新聞』2008年5月26日と『労働新聞』2008年5月30日，『労働新聞』2016年10月15日により，2008年5月25日に金正日が同軍部隊を訪問するとともに咸興医学大学を訪問していること,『労働新聞』2014年7月1日で金正恩が咸鏡南道定平郡花島を訪問した際に，同軍部隊部隊長が迎えに来たことが報じられたことからわかる。

平安北道から慈江道にかけての国境地帯に配置されている第8軍団は第593軍部隊である。これは,『労働新聞』1998年11月3日で1998年11月2日に金正日が同軍部隊を訪問したことが発表され,『労働新聞』1999年10月11日と『労働新聞』2004年1月17日と『労働新聞』2004年5月25日の記事と照合することで同部隊が平安南道で農村支援をしたり，白馬－鉄山間水路工事に参加したりしていること，そして,『労働新聞』2010年6月20日と『労働新聞』2015年5月19日などにより, 2010年6月19日に金正日が同軍団を訪問するとともに平安北道の経済部門を現地指導したことが示されていることからわかる。

咸鏡北道と両江道の北部地帯に配置されている第9軍団は第264軍部隊である。これは,『労働新聞』2006年5月29日で，1970年5月29日に金日成が同軍部隊を訪問したことが言及されたが，この日を含む5月25日～30日に金日成は咸鏡北道を訪問していること（社会科学院歴史研究所 1991, 423),『労働新聞』2001年11月7日で金正日が2001年11月6日に同軍部隊の芸術宣伝隊公演を観覧したことが発表されたが，この日に咸鏡北道清津にある羅南炭鉱機械連合企業所や清津バス工場を訪問していたことが後に発表されていることからわかる（チェ グァンジュ

ン 2002)。

東海岸の元山周辺に配置されている第10軍団（旧：第1地区司令部）は第287軍部隊である。『労働新聞』2005年7月23日と『労働新聞』2005年7月24日などにより, 2005年7月21日に金正日が元山製塩所を訪問してその翌22日に元山市薪島にある同部隊所属の防御隊を訪問したことが示されること,『労働新聞』2015年3月12日で金正恩が薪島を訪問した際に，同軍部隊長が迎えに来ていることが記されていることからわかる。

パラシュート部隊である第11軍団は第630軍部隊である。これは『労働新聞』2012年12月18日の記事や『労働新聞』2015年2月15日の記事にある軍団長の名前と『労働新聞』2017年4月13日の記事にある同軍部隊長の名前が同一であることからわかる。

白頭山地区の第12軍団は第380軍部隊である。これは『労働新聞』2016年11月25日で同軍部隊が山岳戦闘を専門にした軍団級部隊であることが示されていることでわかる。

首都を防衛する第91平壌防御軍団は第966軍部隊である。これは, 韓国の2011年2月27日発および12月13日発の聯合ニュースなどでもたらされた情報であるが, 2012年10月6日に金正恩が平壌の万景台遊戯場や大城山遊戯場を訪問した際に，これらの建設に当たった同軍部隊と第3軍団の指揮官たちが迎えに出ていることが『労働新聞』2012年10月7日の記事にあることから, この情報の正確さを確認することができる。

平壌地区高射砲兵軍団は第837軍部隊である。2019年に刊行された『金正日全集25』には，金正日が1952年10月18日の金日成の同軍部隊管下第379軍部隊中隊火力陣地の訪問に言及したことが記されており，この軍部隊が平壌で防空任務に就いている高射砲兵部隊であることを示している。

空軍司令部は第564軍部隊である。これは,『労働新聞』1997年10月10日で「第564空軍大連合部隊」という表記があること,『労働新聞』2004年5月16日で5月に金正日が空軍司令部を含む軍人家族芸術小組公演を観覧したことが発表されたが，2013年に刊行された『金正日選集22（増補版)』のこの公演観覧に関する談話の文面では空軍司令部がコードナンバーで表記されていることからわかる（『金正日選集22（増補版)』2013, 81-89)。

海軍司令部は第572軍部隊である。これは『労働新聞』2014年11月23日の記事で同軍部隊が軍団級で海軍部隊であること,『労働新聞』2014年12月13日に海軍司令部の政治委員を「大連合部隊政治委員」と記述して海軍が空軍同様ひとつの軍種であると同時に1個の軍団級部隊であることを示していることからわかる。

戦略ミサイルを担当する戦略軍司令部は第639軍部隊である。これは,『労働新聞』2012年3月3日の記事に1974年8月に金日成が同司令部を，2002年3月に金正日が同司令部を訪問したことに関する記述があるが, これらの訪問に関する『労働新聞』2002年3月14日の記事を照合することで確認することができる。

最高指導者および党・政府の要人を守る護衛司令部は第963軍部隊である。これは韓国で2010年4月23日発の聯合ニュースで報じられたが, 脱北者に同軍部隊の出身者が少なくないことは2006年9月19日にソウルの国防部建物の前で軍隊出身の脱北者101人がデモをした際に，発表された参加者名簿で確認することができる（Daily NK 2006年9月19日)。そして，2019年に刊行された『金正日全集25』には，金正日が抗日パルチザン世代の要人の健康に気を配ることを同軍部隊長に指示していることが記述されており, この情報を裏づけることができる（『金正日全集25』2019, 16-18)。

第425機械化歩兵師団は第671軍部隊である。『労働新聞』2015年12月24日には同軍部隊が機械化部隊であることが示されている。そして，同師団は2001年4月に金正日が訪問したとの情報を韓国側が把握しており，平壌の公式報道のなかでこの時期に金正日が訪問した機械化歩兵師団は同軍部隊だけであることからわかる（『労働新聞』2001年4月26日)。

第108機械化歩兵師団は第604軍部隊である。『労働新聞』2021年11月7日には同軍部隊が機械化部隊であることが示されている。同師団の位置は『労働新聞』1995年9月21日に, 咸鏡南道栄光郡鳳興協同農場の農場員が訪問したことに関する記事があり，栄光郡とそれに隣接する咸興周辺であることがわかる。同軍部隊の位置は一方，1998年に同師団の師団長が前・作戦局長の金明国であることが韓国側に把握されている。同師団を金正日が訪問したのが1998年4月25日であり（『労働新聞』2000年12月27日)，当時の報道ではこの日に金正日が訪問したのが同軍部隊であることで（『労働新聞』1998年4月26日)，両者が同一のものであることがわかる。

第806機械化歩兵師団は第757軍部隊である。『労働新聞』2021年11月7日には同軍部隊が機械化部隊であることが示されている。同軍部隊の位置は，金正日が1998年5月3日に同部隊を訪問した時，その日に江原道高山郡にある釋天寺を視察していることから江原道のなかに駐屯していることがわかる。

第815機械化歩兵師団は第337軍部隊である。『労働新聞』2021年11月7日には同軍部隊が機械化部隊であることが示されている。同師団の位置は黄海北道沙里院および瑞興であることが同師団で服務した複数の脱北者により知られている。『労働新聞』1998年1月2日と『労働新聞』1998年1月3日により，1月1日に金正日が同部隊を訪問して翌2日に平壌市内の万景台革命学院を訪問したことが報じられたことで，同部隊は平壌からの交通の便が良い場所に位置していることがわかる。沙里院も瑞興も陸路で平壌からの日帰りが十分可能な場所である。

第105タンク師団は第105軍部隊であり，その上級単位である第820訓練所は第488軍部隊である。第105タンク師団は当初第9タンク旅団であり，隊号は第105軍部隊であったことは，萩原氏の資料集と1972年に刊行された社会科学出版社の戦史などによって知ることができる（社会科学出版社 1972, 156-157; 萩原 1996b, 163, 175, 224, 227）。そして，第488軍部隊が第105タンク師団を主力とする軍部隊であることは金正日が1999年12月23日に同軍部隊を訪問した際に言及している（『金正日全集59』2024, 354-361）。

第518砲兵師団は第375軍部隊であると推定される。これは『労働新聞』2008年2月1日に，同軍部隊が「一当百の区分隊たちをもつ強力な連合部隊」であると表現されていることによる。「一当百」とは1人が100人の敵を倒す意味で用いられるが，これが小隊から大隊までを意味する区分隊の形容詞に用いられていることは同軍部隊が砲兵師団であることを意味するとみられるからである。

このほか大連合部隊または連合部隊と呼ばれていて，閲兵式などの報道では出てこない軍部隊は以下のとおりである。

第570軍部隊は特殊部隊である教導指揮局である。これは脱北者からもたらされた情報であるが，脱北者に同軍部隊の出身者が少なくないことは2006年9月19日にソウルの国防部建物の前で軍隊出身の脱北者101人がデモをした際に，発表された参加者名簿で確認することができる（Daily NK 2006年9月19日）。そして，2017年に刊行された『金正日全集18』に同軍部隊が特殊部隊を意味する「狙撃・

軽歩兵部隊」であると述べられていることはこの情報を裏づけている（『金正日全集18』2017, 20-33）。

第583軍部隊は軍事建設局である。これは，同局に十数年にわたり勤務して小隊長を数年経験した脱北者である林永宣が述べているものである。林永宣が1994年にソウルで出版した著作で本人が同局で従事した建設事業の内容が細かく書かれていることや，2013年に刊行された『金正日選集19（増補版）』で，同軍部隊が建設に従事していることを示す記述があることで裏づけられる（林永宣 1994;『金正日選集19（増補版）』2013, 314-321）。

第534軍部隊は後方総局である。『労働新聞』2014年1月12日には金正恩が同軍部隊指揮部を訪問し，同軍部隊が朝鮮戦争時に後方物資を保障したことやこんにちまでの軍人生活の向上に貢献したことに言及したこと，金正日や金正恩が同軍部隊所属の工場や農場，病院を訪問したことが示されている。その工場や農場の範囲が平壌，平安南道，平安北道，江原道，黄海南道などにわたっていることが『労働新聞』2001年7月17日，同2001年9月23日，同2001年11月18日，同2002年6月18日，同2004年1月13日，同2005年7月18日，同2011年11月14日，同2013年5月26日，同2014年1月7日，同2014年5月9日，同2014年5月28日，同2014年11月15日，同2015年12月16日，同2017年2月21日などの記事に示されている。

第597軍部隊は東海艦隊である。これは，『労働新聞』2014年6月16日にある同軍部隊長の名前と『労働新聞』2015年1月31日にある同艦隊長の名前が一致することからわかる。

第587軍部隊は西海艦隊である。これは海軍では艦隊より下位の単位を連合部隊とは呼ぶことはないこと，朝鮮の艦隊は東海艦隊と西海艦隊しかないことからわかる。

さらに，大連合部隊や連合部隊と呼ばれていないものの，軍事部門の芸術コンクールなどのイベントの参加状況から，軍団級の扱いを受けていることがわかる組織に，火力指揮局（旧：砲兵司令部），偵察総局（旧：偵察局），作戦総局（旧：作戦局）がある。

火力指揮局は第531軍部隊である。これは，同軍部隊が砲兵司令部であったことは先に述べた萩原氏も指摘しており，その資料集で示されている（萩原 1996b,

168)。そして,『労働新聞』2014年7月7日で砲兵司令部がこんにちの火力指揮局であることを確認することができる。

偵察総局は第586軍部隊である。これは，同軍部隊が朝鮮戦争より前から存在することは萩原氏の資料集で確認される（萩原 1996b, 175, 200)。同軍部隊が旧偵察局であることは韓国情報で示された。そして，2009年5月10日発の韓国の聯合ニュースが偵察局の偵察総局への昇格を報じ，偵察総局の存在は『労働新聞』2013年3月29日の報道で確認されたことからこれらの情報の正確性は裏づけられる。

作戦総局は第525軍部隊である。同軍部隊が朝鮮戦争より前から存在することは萩原氏の資料集でも確認される（萩原 1996b, 151-152)。同軍部隊が作戦局であることは韓国情報で示され,『労働新聞』1991年2月11日が作戦局の存在を示したことで，この情報の正確性は裏づけられる。そして，作戦局が作戦総局に昇格したことは『労働新聞』2016年1月5日に示されている。

こうして軍団級の単位にそれぞれコードナンバーを付した結果は表3-1のとおりである。

3 師団級単位のコードナンバー

萩原氏は資料のなかの，人民軍内部文書を細かく分析し，朝鮮戦争開戦当時の軍部隊のコードナンバーを割り出す作業を行っている。作業のポイントは軍部隊の位置，指揮官の名前，文書に記載された順序などの照合である。その作業の結果，第1歩兵師団が第115軍部隊，第2歩兵師団が第235軍部隊，第3歩兵師団が第395軍部隊，第4歩兵師団が第485軍部隊，第5歩兵師団が第615軍部隊，第6歩兵師団が第655軍部隊，第12歩兵師団が第825軍部隊であることが明らかにされた（萩原 1993; 1995)。

朝鮮戦争当時のコードナンバーが戦争後も引き継がれていることは朝鮮労働党や政府の機関紙などで確認することができる。

第115軍部隊すなわち近衛第1歩兵師団の存在は『労働新聞』2010年4月15日の記事で確認することができる。1951年10月20日時点では第3軍団管下にあった

表3-1　人民軍軍団級単位のコードナンバー

正式名称	コードナンバー	位置など
第1軍団	第313軍部隊	前線東部
第2軍団	第567軍部隊	前線中東部
第3軍団	第526軍部隊	平壌周辺西側
第4軍団	第233軍部隊	前線西南部
第5軍団	第549軍部隊/第327軍部隊	前線中部
第7軍団	第324軍部隊	咸鏡南道咸興地区
第8軍団	第593軍部隊	平安北道・中朝国境
第9軍団	第264軍部隊	北部・咸鏡北道方面
第10軍団	第287軍部隊	東海岸・元山地区
第11軍団	第630軍部隊	特殊作戦軍
第12軍団	第380軍部隊	白頭山地区
第91首都防御軍団(平壌防御軍団,第91訓練所)	第966軍部隊	平壌
平壌地区高射砲軍団	第837軍部隊	平壌
第108機械化歩兵師団(108訓練所)	第604軍部隊	咸興・栄光地区
第815機械化歩兵師団(815訓練所)	第337軍部隊	黄海北道沙里院・瑞興
第806機械化歩兵師団(806訓練所)	第757軍部隊	江原道淮陽付近
第425機械化歩兵師団(425訓練所)	第671軍部隊	(未詳)
第518砲兵師団(518訓練所)	第375軍部隊	(未詳)
第820訓練所	第488軍部隊	(未詳)
第105タンク師団	第105軍部隊	(未詳)
空軍司令部	第564軍部隊	(未詳)
海軍司令部	第572軍部隊	(未詳)
東海艦隊	第597軍部隊	東海岸
西海艦隊	第587軍部隊	西海岸
戦略軍司令部	第639軍部隊	(未詳)
護衛司令部	第963軍部隊	(未詳)
教導指導局	第570軍部隊	(未詳)
軍事建設局	第583軍部隊	(未詳)
後方総局	第534軍部隊	(未詳)
火力指揮局	第531軍部隊	(未詳)
偵察総局	第586軍部隊	(未詳)
作戦総局	第525軍部隊	(未詳)

(出所) 筆者作成。

（國防部軍事編纂研究所 2001b, 155-267）。『労働新聞』2002年12月12日の記事と朝鮮中央テレビ2014年8月7日の報道で現在は平安南道に位置し，引き続き第3軍団管下にあることがわかる。

第235軍部隊すなわち近衛姜健第2歩兵師団の存在は『労働新聞』2008年11月17日および『民主朝鮮』2007年4月8日の記事で確認することができる。1951年10月20日時点では第2軍団管下にあった（國防部軍事編纂研究所 2001b, 155-267）。『労働新聞』1997年4月16日，『労働新聞』2005年11月24日の記事で現在は前線東部に位置していることがわかり，前線東部の第1軍団管下にあると推定される。

第395軍部隊すなわち近衛ソウル第3歩兵師団の存在は『労働新聞』2000年12月28日で確認することができる。1951年10月20日時点では第7軍団管下にあった（國防部軍事編纂研究所 2001b, 155-267）。同じく『労働新聞』2000年12月28日で現在は黄海北道・開城方面の前線に位置することがわかり，前線西部の第2軍団管下にあると推定される。

第485軍部隊すなわち近衛ソウル金策第4歩兵師団の存在は『労働新聞』2003年10月30日の記事で確認することができる。1951年10月20日時点では第4軍団管下にあった（國防部軍事編纂研究所 2001b, 155-267）。『労働新聞』1999年5月29日で現在は前線中部の第5軍団の管下にあることがわかる。

第615軍部隊すなわち第5歩兵師団の存在は『労働新聞』2005年8月3日の記事で確認される。1951年10月20日時点では第4軍団管下にあった（國防部軍事編纂研究所 2001b, 155-267）。同じく『労働新聞』2005年8月3日で現在は前線中部の第5軍団管下にあることがわかる。

第655軍部隊すなわち近衛第6歩兵師団の存在は『労働新聞』2012年4月28日の記事で確認される。1951年10月20日時点で第5軍団管下にあった（國防部軍事編纂研究所 2001b, 155-267）。『労働新聞』同2001年2月8日で現在は開城付近に位置し，前線西部の第2軍団管下にあることがわかる。

第825軍部隊すなわち安東第12歩兵師団については，『労働新聞』1998年8月3日の写真で存在を確認することができる。1951年10月20日時点では第5軍団管下にあった（國防部軍事編纂研究所 2001b, 155-267）。1975年3月5日に同師団所属の少尉が脱北して，同師団が第5軍団管下にあることを明らかにした（『朝鮮日報』

1975年3月22日)。そして，同じく『労働新聞』1998年8月3日の写真で引き続き前線中部の第5軍団の管下にあることがわかる。

このほか朝鮮戦争開戦初期に存在した師団でコードナンバーがわかるものに，第7歩兵師団，第8歩兵師団，第9歩兵師団，第10歩兵師団，第13歩兵師団，第15歩兵師団がある。

第7歩兵師団は第595軍部隊である。同師団はもともと内務省管下に組織された38警備第7旅団であり，黄海道市邊里付近に駐屯し，1950年7月20日に第7歩兵師団への改編が開始された（朱栄福 1979, 172-174; ヴォルコフスキイ 2003, 87)。1951年10月20日時点では第7軍団管下にあった（國防部軍事編纂研究所 2001b, 155-267)。同師団には「柿の木中隊」との別名をもつ女性海岸砲中隊があり,『労働新聞』2006年11月6日に同軍部隊の管下にこれがあることが示されていることから，同師団と同軍部隊は同一のものであることがわかる。そして，2017年4月15日の閲兵式で第10軍団が「柿の木中隊」を有することが紹介され, 同師団は現在東海岸元山付近の第10軍団の管下にあることがわかる。

第8歩兵師団は第851軍部隊である。同師団はもともと内務省管下に組織された38警備第1旅団であり，江原道杆城付近に駐屯し，1950年6月25日の開戦時には江陵への攻撃に参加した。同年7月1日から38警備第1旅団は第8歩兵師団に改編され，8月2日～4日に慶尚北道安東から洛東江に到着して渡河作戦を開始した。1952年9月18日に始まった戦術反撃作戦で第8歩兵師団は江原道高城郡の351高地戦闘に参加した（朱栄福 1979, 172-174; 軍事科学院軍事历史研究部 1990, 170-172; 中央日報特別取材班 1993, 76-77; ヴォルコフスキイ 2003, 61, 70, 89-90)。この戦歴は，1980年に刊行された『金日成著作集6』に収録されている金日成の1951年4月28日の同軍部隊における演説のなかで洛東江渡河戦闘に言及されていること，同軍部隊の看護員が，同軍部隊が38警備隊として組織され，洛東江渡河戦闘にも参加したと述べていること（『金日成著作集6』1980, 371-382; キム ジンソン 2013),『労働新聞』2001年5月19日には，同軍部隊は351高地戦闘に参加した師団であると書かれていることとまったく一致しており，同師団と同部隊が同一のものであることがわかる。1951年10月20日時点では第1軍団管下にあった（國防部軍事編纂研究所 2001b, 155-267)。同師団は『労働新聞』2002年10月15日および『労働新聞』2014年12月30日で現在前線東部の海岸に配置されている

ことが示されており，前線東部の第1軍団管下にあるものと推定される。

第9歩兵師団は第315軍部隊である。同師団ももともと内務省管下に組織された38警備第3旅団であり，黄海道竹川付近に駐屯し，第1旅団と同じく1950年7月1日から第9歩兵師団に改編された（朱栄福 1979, 172-174; 中央日報特別取材班 1993, 76-77; ヴォルコフスキイ 2003, 70）。萩原氏の資料集にはこの改編途中の軍部隊の史料が収録されており，そのなかにある軍部隊長の名前などから同師団が同軍部隊であることがわかる（萩原 1996b, 239-240）。1951年10月20日時点では第6軍団管下にあった（國防部軍事編纂研究所 2001b, 155-267）。同師団は『労働新聞』1972年4月9日に出ているため存続は確認されるが，配置状況などは現在の資料状況では不明である。

第10歩兵師団は第756軍部隊である。萩原氏の資料集にある1950年1月17日付の民族保衛相・総参謀長による命令書と5月17日付の砲兵指揮長の指令書を照合することで同軍部隊と第2民青訓練所が同一のものであることがわかり，また，当時工兵局にいた朱栄福の著書で，同訓練所が第10歩兵師団に改編されたことがわかる（朱栄福 1979, 207; 萩原 1996b, 147-148, 151-152）。1952年6月時点で同師団は第4軍団管下にあった（朝鮮労働党出版社 1998, 296）。2008年6月12日で金正日が同師団を訪問したことが発表されたことで存続は確認されるが，配置状況などは現在の資料状況では不明である。

第13歩兵師団は第246軍部隊である。これも萩原氏の資料集にある1950年1月17日付の民族保衛相・総参謀長による命令書と5月17日付の砲兵指揮長の指令書を照合することで同軍部隊と第1民青訓練所が同一のものであることがわかり，また，当時工兵局にいた朱栄福の著書で，同訓練所が第13歩兵師団に改編されたことがわかる（朱栄福 1979, 207; 萩原 1996b, 147-148, 151-152）。1951年10月20日時点では第2軍団管下にあった（國防部軍事編纂研究所 2001b, 155-267）。1977年1月6日に同師団の兵士1人が韓国側に帰順したことで同軍部隊が当時第1軍団管下にあることが知られるようになった（『朝鮮日報』1977年2月18日）。『労働新聞』2011年6月10日で同師団が軍人家族芸術公演に参加していることが報じられ，同師団の存続は確認されるが，配置状況などは現在の資料状況では不明である。

第15歩兵師団は第766軍部隊である。これも第10，第13歩兵師団と同様，萩原

表3-2　人民軍師団のコードナンバー

正式名称	コードナンバー	現在の位置など
第1歩兵師団	第115軍部隊	平安南道, 第3軍団管下
近衛姜健第2歩兵師団	第235軍部隊	前線東部, 第1軍団管下
近衛ソウル第3歩兵師団	第395軍部隊	前線西部(黄海北道・開城方面の前線), 第2軍団管下
近衛ソウル金策第4歩兵師団	第485軍部隊	前線中部, 第5軍団管下
第5歩兵師団	第615軍部隊	前線中部, 第5軍団管下
近衛第6歩兵師団	第655軍部隊	前線西部, 第2軍団管下
第7歩兵師団	第595軍部隊	東海岸元山付近, 第10軍団の管下
第8歩兵師団	第851軍部隊	前線東部, 第1軍団管下
第9歩兵師団	第315軍部隊	(不明)
第10歩兵師団	第756軍部隊	(不明)
安東第12歩兵師団	第825軍部隊	前線中部, 第5軍団管下
第15歩兵師団	第766軍部隊	前線西部, 第2軍団管下

(出所)筆者作成。

氏の資料集にある1950年1月17日付の民族保衛相・総参謀長による命令書と5月17日付の砲兵指揮長の指令書を照合することで同軍部隊と第3民青訓練所が同一のものであることがわかり，また，当時工兵局にいた朱栄福の著書で，同訓練所が第15歩兵師団に改編されたことがわかる（朱栄福 1979, 207; 萩原 1996b, 147-148, 151-152)。1951年10月20日時点では第3軍団管下にあった(國防部軍事編纂研究所 2001b, 155-267)。1978年7月28日に同師団の兵士1人が韓国側に帰順したことから，同師団が当時第2軍団管下にあることが知られるようになった。2002年2月19日に帰順した同師団の兵士1人が記した著作では同師団は開城市長豊郡に配置されているとされ，引き続き同地を含めた前線西部にある第2軍団の管下にあることがわかる。

以上の朝鮮戦争開戦時から存在する人民軍各師団のコードナンバーは表3-2のとおりである。

まとめ

人民軍のコードナンバーは,基本的にソ連軍の方式が導入されたものである。帝国陸軍の場合,「通称号」あるいは「通称番号」と呼ばれたコードナンバーは，制度の改変によって幾度かの変更があったが，人民軍の場合はこうした改変がなかった。そのため，軍部隊にはその組織された時点から将来的に変更がない原則でコードナンバーが付与されたといえる。

コードナンバーを付与する目的は当該部隊の規模，属性，作戦行動に関する情報を秘匿することにある。表3-1，表3-2にみられるとおり，軍団級の単位，師団級の単位のいずれをみても数字に規則性がみられず,乱数であることがわかる。したがって，数字そのものから規模，属性，作戦行動に関する情報を得ることは不可能である。しかしながら，コードナンバーに関する具体的な情報を蒐集して積み上げていくと，その秘匿されている部分につながる手がかりを掴むことが可能になることは本章の作業で示したとおりである。

たとえば，本書第4章で金日成が戦争中に政治統制機関である人民軍総政治局に指示して展開させた模範中隊運動に関して，それが最初に開始された部隊は公式の史料では第825軍部隊としか示されていないが，これは第12歩兵師団であることがわかる。そして，この第4章で示された建軍の過程をみると，この師団は中国人民解放軍から開戦前に引き渡された部隊であることもわかる。

同じく1960年に金日成が展開を指示した赤旗中隊運動が開始された部隊は公式文献では第109軍部隊とか,第478軍隊と表記されている。これも第478軍部隊が軍団級の第105タンク師団であることがわかれば，この運動が始まった部隊が第105タンク師団管下の部隊であることを知ることができる。

また，本書第5章で金正日が学生時代や党中央委員会の平職員であった頃に訪問した部隊のうち，第567軍部隊は西部前線の第2軍団，第597軍部隊が東海艦隊,第526軍部隊が平壌をとりまく第3軍団であることがわかるだけでも,金正日が各地のさまざまな部隊を訪問して軍事に課する見聞を深めてきた事実を知ることができる。

以下，本書で党軍関係を論じるなかで，公式報道や公式文献でコードナンバー

しか表示されない軍部隊に関して，筆者は知り得る限り，当該軍部隊の属性や位置に関する情報を記した。

［文献目録］

〈日本語文献〉

軍事課 1937.「動員部隊等の称呼名に関する件」(陸軍省）軍事課.

朱栄福［チュ ヨンボク］1979.『朝鮮人民軍の南進と敗退――元人民軍工兵将校の手記』コリア評論社.

中川雅彦 2017.「朝鮮人民軍のコードナンバー」『インテリジェンスレポート』(110), 2017年11月.

日本陸軍省 1945.「通称号の沿革概要」日本陸軍省, 1945年11月15日.

萩原遼 1993.『朝鮮戦争――金日成とマッカーサーの陰謀』文藝春秋.

――― 1995.『朝鮮戦争取材ノート』かもがわ出版.

――― 1996a.『米国・国立公文書館所蔵北朝鮮の極秘文書（上）――ソ連占領下の北朝鮮と朝鮮共産党』夏の書房.

――― 1996b.『米国・国立公文書館所蔵北朝鮮の極秘文書（中）――朝鮮戦争を準備する北朝鮮』夏の書房.

――― 1996c.『米国・国立公文書館所蔵北朝鮮の極秘文書（下）――南進から平壌陥落まで』夏の書房.

〈朝鮮語文献〉

國防部軍事編纂研究所 2001a.『소련 군사고문단장 라주바예프의 6・25전쟁보고서 1［ソ連軍事顧問団長ラズバエフの6・25戦争報告書1］』発行地記載なし, 國防部軍事編纂研究所.

――― 2001b.『소련 군사고문단장 라주바예프의 6・25전쟁보고서 3［ソ連軍事顧問団長ラズバエフの6・25戦争報告書3］』発行地記載なし, 國防部軍事編纂研究所.

김진선［キム ジンソン］2013.「녀성혁명가답게 잘 싸워야 하겠소［女性革命家らしくうまく戦わなければなりません］」『인민들속에서102［人民のなかで102］』평양［平壌］, 조선로동당출판사［朝鮮労働党出版社］.

呂政 1991.『붉게 물든 대동강――前인민군사단정치위원의 수기［赤く染まった大同江――前人民軍師団政治委員の手記］』서울［ソウル］, 東亜日報社.

兪成哲 1991.「나의 証言［私の証言］」韓国日報編『証言 金日成을 말한다［証言 金日成を語る］』서울［ソウル］, 韓国日報社.

리순임［リ スニム］1983.「언제나『영웅간호장』이라 불러주시며［いつでも「英雄看護長」とお呼びなさって］」『인민들속에서32［人民のなかで32］』평양［平壌］, 조선로동당출판사［朝鮮労働党出版社］.

사회과학원력사연구소［社会科学院歴史研究所］1981.『조선전사27［朝鮮全史27］』평양［平壌］, 과학백과사전원출판사［科学百科辞典出版社］.

——— 1991.『조선전사（년표2）[朝鮮全史（年表2）]』평양［平壤］, 과학백과사전원출판사［科学百科辞典出版社］.
사회과학출판사［社会科学出版社］1972.『혁명의 위대한 수령 김일성동지께서 령도하신 조선인민의 정의의 조국해방전쟁사1［革命の偉大な首領金日成同志が領導なさった朝鮮人民の正義の祖国解放戦争史1］』九月書房（翻刻）.
이정연［イ ジョンヨン］2007.『북한군에는 건빵이 없냐——귀순 장교 출신 북한 담당 저널리스트가 쓴 북한군 A-Z 그리고 핵［北朝鮮軍には乾パンがないのか——帰順将校出身北朝鮮担当ジャーナリストが書く北朝鮮軍 A-Z そして核］』서울［ソウル］, 플래닛미디어［プラネットメディア］.
임영선［林永宣］1994.『남쪽으로 흐르는 강［南側に流れる川］』서울［ソウル］, 한가람［ハンガラム］.
조선로동당출판사［朝鮮労働党出版社］1998.『위대한 수령 김일성동지의 불멸의 혁명업적9——주체형의 혁명 무력 건설［偉大な首領金日成同志の不滅の革命業績9——主体型の革命武力建設］』평양［平壤］, 조선로동당출판사［朝鮮労働党出版社］.
中央日報特別取材班 1993.『秘録・朝鮮民主主義人民共和国（下）』서울［ソウル］, 中央日報社.
최관준［チェ グァンジュン］2002.「라남의 봉화가 타오르기까지［羅南の烽火が燃え上がるまで］」『주체시대를 빛내이시며41［主体時代を輝かせなさって41］』평양［平壤］, 조선로동당출판사［朝鮮労働党出版社］.
『김정일선집［金正日選集］(各巻)』평양［平壤］, 조선로동당출판사［朝鮮労働党出版社］.
『김정일전집［金正日全集］(各巻)』평양［平壤］, 조선로동당출판사［朝鮮労働党出版社］.
『김일성저작집［金日成著作集］(各巻)』평양［平壤］, 조선로동당출판사［朝鮮労働党出版社］.
『로동신문［労働新聞］』평양［平壤］, 로동신문사［労働新聞社］.
『민주조선［民主朝鮮］』평양［平壤］, 민주조선사［民主朝鮮社］.
『朝鮮日報』서울［ソウル］, 朝鮮日報社.
Daily NK 서울［ソウル］, (주) 데일리엔케이［(株) デイリー NK］, https://www.dailynk.com/.
연합뉴스［聯合ニュース］, 서울［ソウル］, https://www.yna.co.kr/.

〈中国語文献〉

军事科学院军事历史研究部編 1990.『中国人民志愿军抗美援朝战史』北京, 军事科学出版社.
中国军事百科全书编审委员会 1997.『中国军事百科全书——军事技术Ⅰ』北京, 军事科学出版社.
中国人民解放军军事科学院 1986.『苏联军事百科全书中译本（第2卷）——军队建设』北京, 解放军出版社.

〈ロシア語文献〉

Волковский, Н. Л.［ヴォルコフスキイ, N. L.］主編 2003. *Война в Корее, 1950-1953*［朝鮮における戦争1950 ～ 53年］, Санкт-Петербург［サンクトペテルブルク］, ООО «Издательство В56 Полигон»［V56パリゴン出版社］.
Министерство обороны российкой федераций Институт военной истории［ロシア国防省軍事史研究所］1994. *Военная энциклопедия 2*［軍事百科辞典2］, Москва［モスクワ］, Военное издательство［軍事出版社］.

©Masahiko Nakagawa 2025
本書は「クリエイティブ・コモンズ・ライセンス表示4.0国際」の下で提供されています。
https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deed.ja